

2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【宮城県】

学校名【宮城県南郷高等学校】

1 実践テーマ	I・II・III・IV・V(複数選択可)
2 実施対象者 (学年・人数)	宮城県南郷高等学校 全校生徒 計122名 1学年34名 2学年40名 3学年48名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名(体育) ② その他(LHR全校生徒, 総合的な探究の時間: 1学年義足体験学習) (2) 地域における活動 ① イベント名(1学年被災地復興支援) ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	スポーツを通して持続可能な社会について考え, 地域に貢献する力を育む。 ◆オリンピック・パラリンピックを題材にして, 持続可能な社会について考える。 ◆被災地復興支援や地域貢献の一環として, 地域の方々とスポーツ交流を行い, 共生社会や社会貢献について考える機会をつくる。 ◆フェアプレイ精神や思いやり, ボランティア精神, 多様性を尊重する態度等を育ませる。
5 取組内容	1. LHR 全校生徒対象 9月5日(木) 1時間 体育館 オリピズムやフェアプレイ精神を学び, 日常生活や将来に活かせることを考え, 「開催まであと1年, 令和時代最大イベント『東京オリンピック』」をテーマに実施した。 五輪開催決定の瞬間や2016年リオ五輪で活躍した日本選手の映像, 2020年東京五輪の概要について紹介してから, リオデジャネイロ五輪で活躍した選手のインタビューやエピソードからフェアプレイについて考えさせた。その内容とオリンピックシンボルやクーベルタンの言葉, オリピズムを関連させてまとめとした。 2. 義足体験 1学年対象 ① 事前学習 10月23日(水) 1時間 自分たちが生きている地域社会を知り, 課題を見つけて, 被災地復興支援活動で自分たちが何をすべきかを考える機会とした。

② 義足体験 11月7日(木) 2時間 総合的な探究の時間

実際に義足での運動を体験することを通して、障がい者や高齢者にとって住みやすい場所にするためにはどのような工夫が必要かを考えるヒントを得ること、そして、人々の多様な在り方を相互に認め合えるインクルーシブ社会や共生社会を生きる現代において地域として何が課題として挙げられるのか、現代的な課題や持続可能な社会について考える機会とした。

当日は、東京都にある鉄道弘済会の2人をお招きして、義足体験を通して高齢者や障がい者について考えた。生徒はなかなか触れることのない義足を実際に全員が履いて歩くことや筋電電動義手の操作や足底版の型取りといった体験も行った。今回の授業を通しての生徒の感想は、「義足を作るのが大変そう」、「義足・技手を使うのには相当な慣れが必要」、「困っている人や高齢者の方に声をかけるなど何かできることを手伝い、協力したい」などがあった。

こうした学習を通して、社会の課題の発見や解決に向けて他者と協働しつつ主体的に取り組む態度や多様性の尊重(人間としての共通性、他者への共感、思いやり等)、公德心(マナー、フェアプレイ精神、ボランティア精神、おもてなし精神等)の育成・向上を図ることができた。



③ 事後学習

義足体験の事後学習を被災地復興支援活動の事前学習と位置づけて進めていった。


3. 被災地復興支援活動

ボランティアで復興してきている地域での住民の方々との交流を通じて、被災者の方々の心に寄り添うことの大切さや難しさを学ぶ活動である。本校より20キロほど離れた石巻の復興住宅内にある公民館を会場に、農産物販売、餅つきとふるまい、歌(キーボードとカホンを伴奏にして「パプリカ」を合奏)、ボッチャ交流(歌班とボッチャ班は、復興住宅住民への支援活動の宣伝も兼ねた)の4つの班に分かれて支援活動に取り組んだ。ここではボッチャ交流が本事業に当たる。

① 事前学習 12月5日(木) 2時間, 12日(木) 1時間

テーマや役割を決めて、なぜボッチャを行うのか、何のためにボッチャを行うのか、どのようにして楽しんでもらうのかなど役割ごとに考えながら事前準備にとりかかった。



	<p>② 当日12月13日(木) 地域の方にルール説明をし、審判として一緒にゲームを楽しんだ。それぞれの役割をしっかりと果たしており、自分から地域の方々に積極的に話しかけ、交流する様子が見られた。</p>  <p>③ 事後学習 12月19日(木)で振り返り、1月9日(木)は発表準備、1月16日(木)・24日(金)は発表会でこの活動を締めくくった。 発表では、ポッチャで交流した理由を、障がい者や幅広い年代の人たちが安全に取り組めるスポーツがポッチャであるために取り組んだと述べていたことから、地域課題や共生社会について考えることができたと思われる。</p>
<p>6 主な成果</p>	<p>義足体験を終えてから行ったアンケートでは、被災地復興支援活動に向けて、「困っている人や高齢者に声をかけたり、何かできることを手伝って少しでも協力したりする」、「ボランティア」の必要性をあげている生徒が多かった。 そして、実際に被災地復興支援活動を終えてのアンケートから、ボランティア活動を通して他者に貢献し感謝されることやわかりやすく説明することができたこと、多くの人と話すことができたことへの喜びを感じていたことがうかがえる。普段はコミュニケーションが苦手な生徒も、地域の方に親しく話しかけてもらうことで、自然と笑顔で受け答えをすることができていた。 また、それぞれが自分の役割や責任を果たしていたといった感想があったが、一方で自分たちに向けた評価として、改善点について課題を見つけていたこともあげられていたことから、そのことも成果の一つといえる。</p>
<p>7実践において工夫した点(事業の特色)</p>	<p>○教科横断的な学び 全校生徒を対象としたLHRや体育授業、総合的な探究の時間、1学年の被災地復興支援活動を相互に関連させてつなげることで理解を深めさせた。 ○学習したことを学校外(被災地復興支援)で活かす場を設けた。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>○これまでの教育活動をオリパラ教育という角度から見つめると、オリパラ教育といえる活動は結果として実践されていた。今後は、意図的・計画的・組織的に他の教育活動とリンクさせながら、タイミングやどのような教材、アプローチが生徒の興味関心を高め理解度を深め広がっていくのか、研究していく必要がある。 ○復興五輪・パラリンピックを果たす2020東京大会となるためには、東日本大震災の被災地にいる高校生としてまた宮城県として</p>

	<p>何をすべきなのか、生徒とともに考え発信する必要がある。それがオリパラ教育の一つになると考える。</p> <p>○一過性の取り組みではなく、担当者が変わっても、2020開催後にも継続する必要がある学習活動については継続・発展させて取り組みたい。</p>
<p>9来年度以降の 実施予定</p>	<p>生徒が自ら企画を立てて運営することを通して学び合う場をつくっていきたい。スポーツやオリンピック・パラリンピックを題材にしたムーブメントが生徒から提案されて、自分たちで課題に取り組めるような学びの場を設けることである。これからの生活や社会で答えのない課題に直面したとき、自分の考えをもち、そして他者と協働してよりよいものを創出することにつながるからである。</p>